



繪本
敵討

岩見英雄錄

第二

四

遠
2509
35-11



門 遠
號 2509
卷 35-11



繪本後撰言英雄録後編卷之四

玉絹副書而饋小浪舉家話

きてて遊きものも男女の中よりとて実なる子ぞ玉絹いふ
 めう睦月の末にうさ花樹不出よりやど又十日も即ち林とも被
 唐人の一擲千金渾是擔と云は如くわづ東兎のおして意を
 較量放擲を射以豪客の多なるふ別て遊治の少年に打ん
 くのいりやむき情を賣多章産柳子折小難きるやい
 と牡丹の角の東乃間も若く顧の人乃絶る万金とべその賣價
 て薦枕席の娼妓不遠の傍り賣身孩もつらふ其才は償
 ふる贏ある小郎りい親軍ある金篋り是を眞の控銭
 樹やをとり三浦の館を假母の籠を目々に盛りしは不圖も

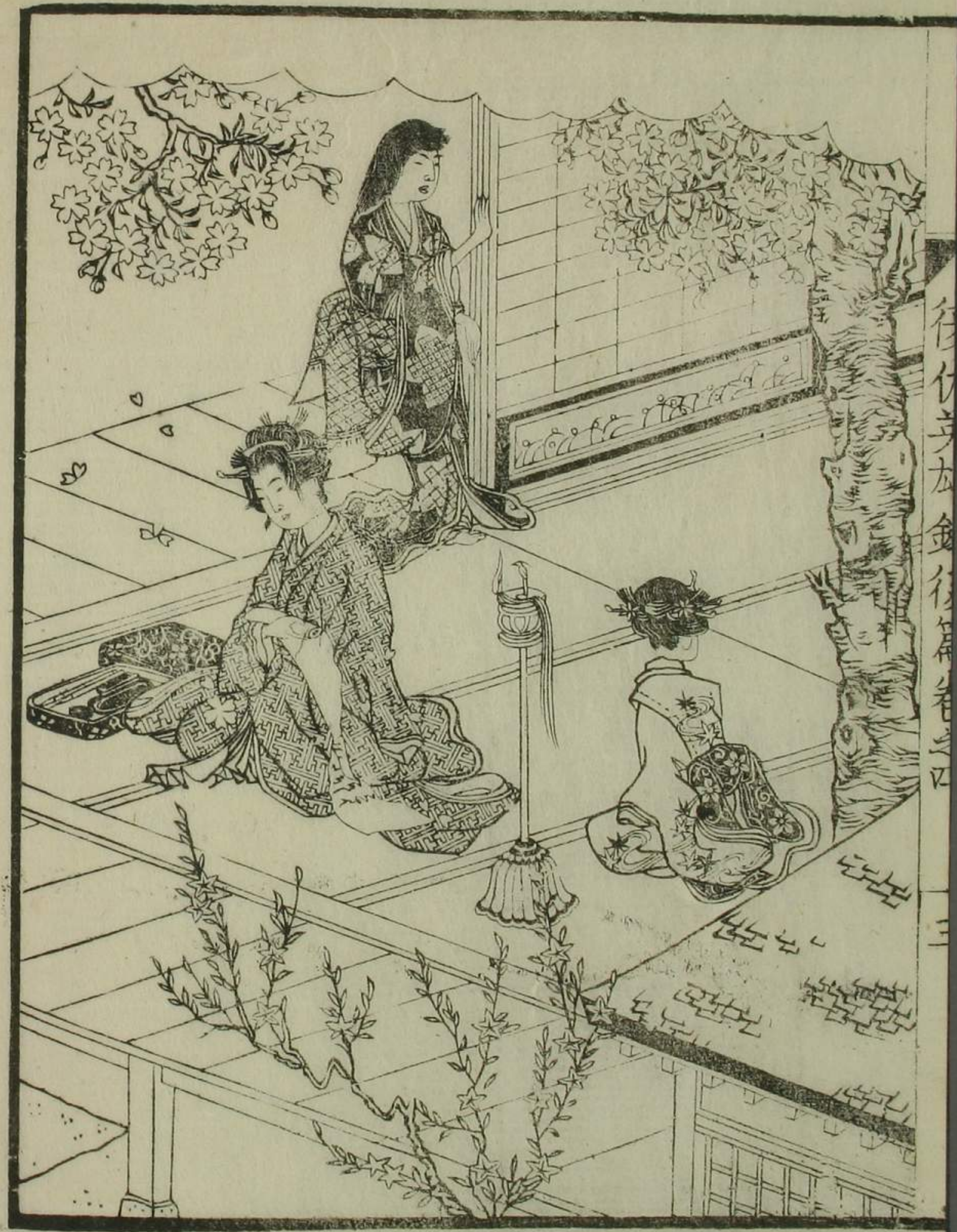
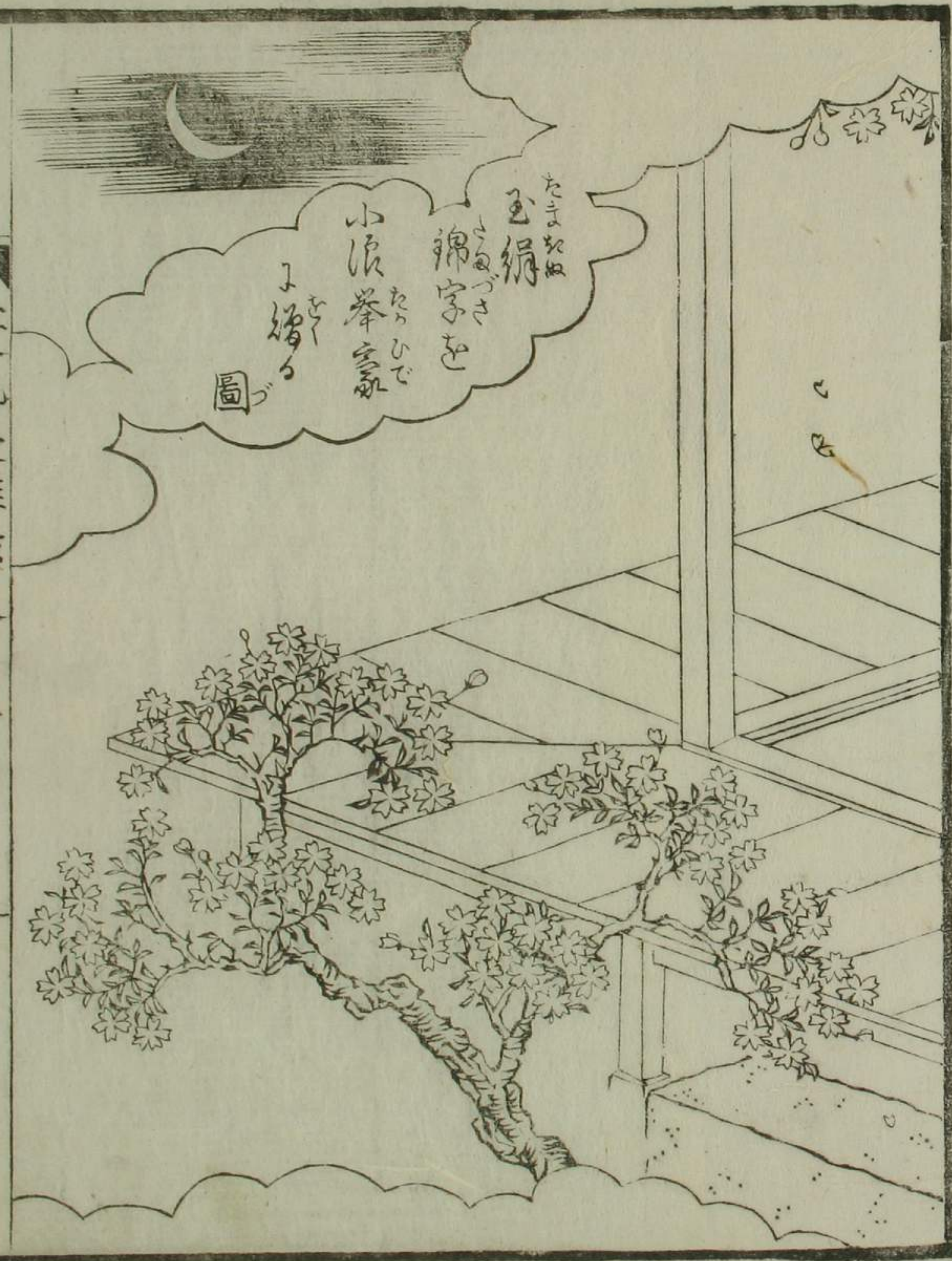
後撰言英雄録後編卷之四

日田官去傍が酒狂し〜 狂子を引出しぬる小浪方花を
 狂人又その事かこし官を傍再ひ堂を結び小浪戎袴さ
 める程三浦屋の園家皆く如伊有んと案一居にに菊
 及下僕等ゆり来く此に次身以物語りなぬうそ此闘戦
 と今見ぬく勢猛小我を忘に形語小く驚き小浪大人の局
 乃拳動小ひ合を連の中く小醒き負負みは起るれとも然程
 の事とていしも有志志供大に説語の成す小言は十四又人の歌
 るんこそ詠けきと下僕い否く是に疑ひ玉も宜るれも
 街中の少年も数多来りて諸在不見居けり子を連い実う若
 い子知わぬはと誰く成味く尋ね玉りて偏驚只今付ひ
 ありと澄とまき告はせ口而右清門始皆台を捲て何れ海の

事どもや結はけ処忌の傳言〜 その身の塵は海に揚りて
 も花も實もあるる人れや彼中挙る稱譽〜 乃玄さば
 玉屑も実前より漸か地より起りて始終を消
 程は固房入りて熟くあひらけは開解の端へといは懐が外
 の上より發りて不圖も皮人の扱ひちさめなり〜 故よこそ悪
 漢の執念くも冠せしるは彼人本日以任使の方ありと及
 ぶる川頭より此方を送は送んと属者信あり〜 使客
 の風流調子もやまに艶治浮屠もやつやぶ一度も一帯は
 結はけも分ちり〜 しが實は弱を掛け強を凌ぐ雄貴
 き丈丈の魂る〜 吾儕の成りも足上〜 永き訣れと
 以上の仇い三人といひ我身は釣る大敵る是に地は立て若や

仇のも掛を帰る力も... 終に兄上も過り遠く... 権言ももくす... 誰くの執事と... 志るり今中... 真跡なるも... かの獨り色... といえ難く... さまいと... せやを... 恩との二乃を...

恩との二乃を... 取へ能る... 何やん... ちよき... 体らび... 五月の月... 成時... 着るる... 上も... 云れ... 終に了...



櫻木の梢生白く時々ぬれける雪と見ると小西二片翹くも風
 無よあは花辨を彼標梅みゆ〜細ども中〜〜〜〜〜
 乃妻のあはれ此節おると縁か如く縁の上は散々家とほむ
 絹を拂ひも何意を恍惚を暫くお茶を飲し居るが側り
 あり料紙箱了整へて列々せせ公を深き硯の海は忠の世
 の濃淡く雲霧流〜〜〜〜〜
 を受りては乃は眼さ〜〜〜〜〜
 けび今日の情れ附き〜〜〜大方ぬ〜〜〜書をもその大方紙
 紙なり物〜〜〜終〜〜〜自獲〜〜〜館主主婦の兼小出〜〜〜
 乃上の事故は同り小浪の大人の一度り〜〜〜再度〜〜〜危言
 場より起る〜〜〜その恩は細〜〜〜ぬ〜〜〜それ禮謝を

述るとは流め〜〜〜
 せむ易此事はこそ何と幸ひ今宵彼を〜〜〜
 殺せ〜〜〜
 贈遺状 個多々奴僕三人と案り〜〜〜
 せむ玉絹の打も〜〜〜
 ら〜〜〜
 る了〜〜〜
 ら此の赤繩は又誰人を繋ぎ〜〜〜
 小浪才虎 沉溺歌吹海話
 斯て三浦屋の弥太郎〜〜〜
 許を〜〜〜

子言牌は進き酒は濁り野澤の里小川り小根が許を妨めて
 才藏子造ひ三浦屋の口証とのべ揃も今日の不まも碎客
 の酒狂りさ 飯中を唄が 難儀作りいじり厚き御懇情を
 ぬり難免路りの多岐に 足色故よ又い御舟上小あうぬ事
 の内度いじ由云も 酔るき糸くせい必竟皆此方の福を御力上
 小移し小機曾何れ御謝のりさん扱も 是等い御舟上夜中を顧
 りず御安否を候ひ傍者意を表するとは 便と兼せしるり且
 玉指り御交り身と 際り御福をいひ 福りいほべくと
 いひ甚も不徳なる業よい 是等亦公計りのある 御持が糸
 らせいや 館主と玉指の名刺附る 種々の御禮はその後り
 香もふいじき 是や由縁の色籠る 濃紫に手帕は包み又画

取り副ははかせバ才藏たく迷惑け小足痛へる公配はあ
 づりいぬ色元来強暴を挫物 吾等城援くる我天賦の癖
 性なれい々日の事の如き不平を凡々忍び出さるる始末
 自作る好事のも 徳を人々徳ある 是れ是れ表出し厚き御礼を
 又金き所謂いあるは 何れも芳志辱けいいども 毒なげう
 け飯を飯をい 傳えられてそのおくま返し 納免路りい 御敵
 子領承色色りし 以御賜再三再四頻りに 詞を端し 御罷され
 小浪終に 辞みり 承り又納免さる 又画の中は 承り意を
 披き身も小水空の 蹴いや 松くべい 御礼を 御恩と謝
 せる 文俵の 御心 刀の 刃どるれ ば 志を 巻納め 早く 承り
 小分付 酒飯を 設け 辞め 可也 二人の 者左を 承りて こそ 御礼

原この山浪才藏より野郎を擧其家とて奥州行岡所
 なる小島大納言源具永郷波岡の事跡の令弟波岡左衛門佐頭
 忠乃近江守に在る永保のはじめ退糧す書を借ひ加はせ
 辭し今の姓名を改めて同國なる安達郡二本松の被下知者
 のより成便にあり候て武術の師範として年を經りて又比下
 野玉宇都宮の近側なる野澤里に移り児童を集めしめて
 習ふ業武教を日を送りしは二本松にて武術の教を授け者たり
 時に為利ある月中以漸交の人も傳え聞つては我國のお信は
 弓矢は獲らぬ者とも武を考み候は監賊かんを以て徳を降
 んどその才子と改者たり候は物走りて言を同之の博徒浮
 浪人かぞへ民家と開し市井を換りて人の思を有ものありて

小浪必以是を制し威服せむとて自代事を任する人も日々
 よ増り人情賄遺も夥しき小書い名を傍子とてし思實は
 更成りけ能く家政を修りて今今いすべくや富榮ふて奴
 婢の御小守子門客も多し「斯くは夜三浦屋より賜おと
 ついお梅の綿字さしは齋しおめを才藝の業の思えはるを
 流石るれは傍子を呼て中抜今今我梅下の知音許は長し
 一は三浦屋は武士の碎客なりけ同言名なる歌妓玉絹
 を園のさきよせんと推しともえ事け女の故あるりや誰し
 何堅く推す肯ぬは今般もそれ也は件の武士の太は怒罵
 狂ふ事制し難きの許り彼方より我相識子使りて結め是
 すと釈す銭ぬ彼玉絹を我も朋ざらとほよ肉舖子別

産客互の接納小我こがもどくたす魂たまもどくま招きまり又またいい度ど及およびり
その他ほかの招まけけはは暇ひまもどくま終つい小こ来きり予よもどくま「月つきややの全ぜん書しき
さ然しか五ごささ太た丈ぢ丈ぢの身みとと媚めい妓ぎの為ため不ふ殺ころせせるらいい快くわいううぬぬとと
思おもひひろろががりりもも獲とりりととりりもももも朽くち惜じくくとともも彼かれ不ふ可ことと
く形かとといいひひ情じやうののみみとと予よもどくま「猶なほ女にもも
いい甚いもも危あやうう事ことううそそのの産う客きやく若わかもも其その克きやく漢かん等らうののけけ後ごもも亦また
如い何いかぞぞもも郷ていそそ主ぬ成しやう傭じやうひひややさんさん料りやうりり雞けいりりののまま今いま
よりりのの牙が子し途ととと救きう多た伴ばんひひののひひ一い人にん漫まん行ぎやうのの情じやうとと「
云いハハ才さい花かもも後ごもも由ゆ形ぎやう大たい敵てきとともも多た寡かのの知しらら者もの
たたのの何なにぞぞのの事ことをを仕し出でせせとと後ご少せうとと替かいい罷ばりり然しか月つきごご
小せう浪らう才さい花かのの數すう日にちをを経へりりすす三さん浦うらをを不ふととりり其その家け舉あてて満まん館かん

媚妓めいぎをを悉しつくく席せき集じふししむむけけ日にち玉ぎよく漏ももも他ほかの招まけけのの際さいああててその
むはは列りりりぬぬきき小せう浪らう公こう中ちゆう甚しん恨こんびび日にち己こもも苦くぬぬとともも終つい無む連れんてて居い
たたりりがが私わりりはは仲ちゆう居ぐはは儀ぎ乃のいい玉ぎよく漏ものの密みつはは乃のとと委ませせぬぬ仔こ細さいのの事こともも
有ありりとともも鬼おにももああてて我われもも玉ぎよく漏もはは同どう為なるる終つい無む連れんもも何なにとといいふふ
宵よ夜やととももはは行ぎやうくくととももあありり仙せん樂がく館かん主しゆ丈ぢ婦ふいいつつもも更さらりり玉ぎよく漏も
ももけけ由ゆ語ご合がむむりりととつつくく仲ちゆう居ぐ公こう得とく館かん主しゆ丈ぢ婦ふいいつつもも更さらりり玉ぎよく漏も大たい人にんのの
事こともも一いむむばばけけ方かたににととううのの説せついいををしし玉ぎよく漏もがが公こうにに任にんせせとと「
とと呼よぶぶ来きりりととあありりとと告つぐぐとともも玉ぎよく漏もももああれれ方かたのの事ことををかかりり然しかのの事こともも
いい由ゆ人にんああるる事ことももあありりとと告つぐぐとともも玉ぎよく漏もももああれれ方かたのの事ことををかかりり然しかのの事こともも
ららせせむむととももあありりとと告つぐぐとともも玉ぎよく漏もももああれれ方かたのの事ことををかかりり然しかのの事こともも
縁えん竹たけのの事こともも成せい納なつとともも興きやうすすりりななるる宿しゆく殿てんににままのの夜よ寒さむをを傳つふふかかるる

後見入在景後繪卷之四



小浪才流
玉絹
情を話さる
の圖



後見入在景後繪卷之四

重禰は翡翠衾を副す画布に金屏擁圍し設きては調乃れ
 け了鬘を引きて小浪をせり入て火盆の所を撓均し人と待
 間の長廊下縁より芝音を玉絹をやらせりありて生れ心
 小浪も居坐り地のはり宵まき面は熱視より向は個人生
 乃中は在りて道猪り今今入乃輝妍さ一奴の愁眉は柳漸く
 伸半点の嬌唇搦初は綻く指は春の葱根長く墨く眸
 い社の波掃明りりまを地を摩るるる長き両の袂を引き
 遠く播よのせ流さるる寂寥浄塵せりなん着更の衣は拵帯
 隙費した松き女子の帯るるや免しした金と襟は款
 まはは入を着らふ氣を心 林はけよるる若草の温るるをり
 さはげの小浪も碑が如く如く如く如く如く如く如く如く如く

岩見重太郎種季到下野國話

良ありて小浪才麗玉絹は向ひ打續きたる是陰より取も更ぬ色
 は透漏風もいと遠くはるるてや重と共は折腰きり泣くひの
 いふはの寄きも是は膝をむむひの胸は煙火の石の先き動く来
 情詞の集れ綻びて四方山語その序玉絹端を改て留る君乃
 儀は同せ成すの由座るは諸寐の夢は情むむるあの上計は
 てよやと此侍りてをそも何るるゆふいやくんとあふ才感あるを潜
 め去りそのるこそ何と人の愛を愛ひ人の樂を樂むのけ状を思
 るる身の及ぬと云何とぞ我生質の偏因なる世も不平のそよと
 守てい叶りぬとも控る小思びぬ思あり燃るよ去頃より淨身の此廓
 せん毎は後力刀を推ししるの鳴るるはは我は力を能所る

うらみ規ひ見しより秘く信り思ふ遠の道ある人の息女なりんは
 遊女歌妓の中より定る身とまふぬし痛しは必そ深きお有
 るの事るらんかれば一臂の力をも竭さんものと思ひうらむを縁の
 者の鬼角中にも信らざるも必秘か一夜相識密とぬしと時宜
 により身より後と為る事あるも世人の怪しむべくも悲せと思ひ
 ぬこそ縁遠んといせしむかれそは男の身上の一通り妨げを
 ば聞海原とくら同く玉消世も娘しとすゑのすものうらみ候が力
 上の落命るるいやはばも哀し後ふるる一護身刀のすいしも
 細きあまの病厄は尊き法師の加持し玉りし雨よりと幸云
 子侍らしと筒は推松左平がや合先すよ告終りばても僕が
 身のま姓の厚き情意よとけしおりの君の恩を知らぬぬとせは

且今形日やさんちと母兄身の名を記す公若くはもさよりけめ
 深きおはゆばもよ候よりやある期おん心長く待せよと隠す
 大覚をば露もせぬ齋もあは拒むるる人を悩せ冷切
 の静らも小浪の燕次其指する強く同色がて聞ん要も激
 せぬ彼をや譚ふ時して後し小浪のそが枕に就は玉消を
 静ふ休やを給ふべしや次の間よつて人對し睡り居
 了候をこそと呼吸醒しとみ備たふ時言よその聞しものり
 静も小浪の酒醪を優しと玉消始先救の英人と席は班終年
 の頃や比は漸く梅しと梅を食らる後不日や強しとまもさる
 以若の如く盛會と張り其夜も玉消を留めし臥せるとそ
 別ちぬをちあふ物語しひと静し記別れぬ是より屢通ひ

高王絹の内なる時、留宿し、或の留り或の留り
 ども毎も小娘離妓のいせ及て、花車仲居、誦師、押客、と
 小黄白多し、この陰奥山の男達、金の花を咲き、誰れを
 これと厭ふ、き滋賀、喜客ともて、なぬ、是の小娘の字の細波も
 訓る、なまは、彼人、口は贈、実する、平忠度、船后の、旧、花と、誰れ
 さ、波や、滋賀の、歌、本、つ、き、なる、は、新、有、は、ど、よ、その、は、ま
 宇都宮の、曲、中、い、と、さ、く、奴、小、浪、こ、そ、玉、絹、の、情、所、は、色、か、る
 才色、双、全、の、名、妓、る、ど、も、同、也、男、嫌、ひ、小、浪、も、の、と、よ、生、の、毛
 ち、淑、せ、し、き、流、石、は、男、子、の、器、量、る、り、と、は、評、論、給、ふ、か、り
 庄、あ、れ、玉、絹、の、お、ち、解、く、実、の、う、ち、い、き、り、と、は、な、よ、と、い、や、始、め
 野、は、な、る、小、浪、が、な、ま、な、と、贈、り、所、能、継、せ、し、時、使、世、孫、也、成、者

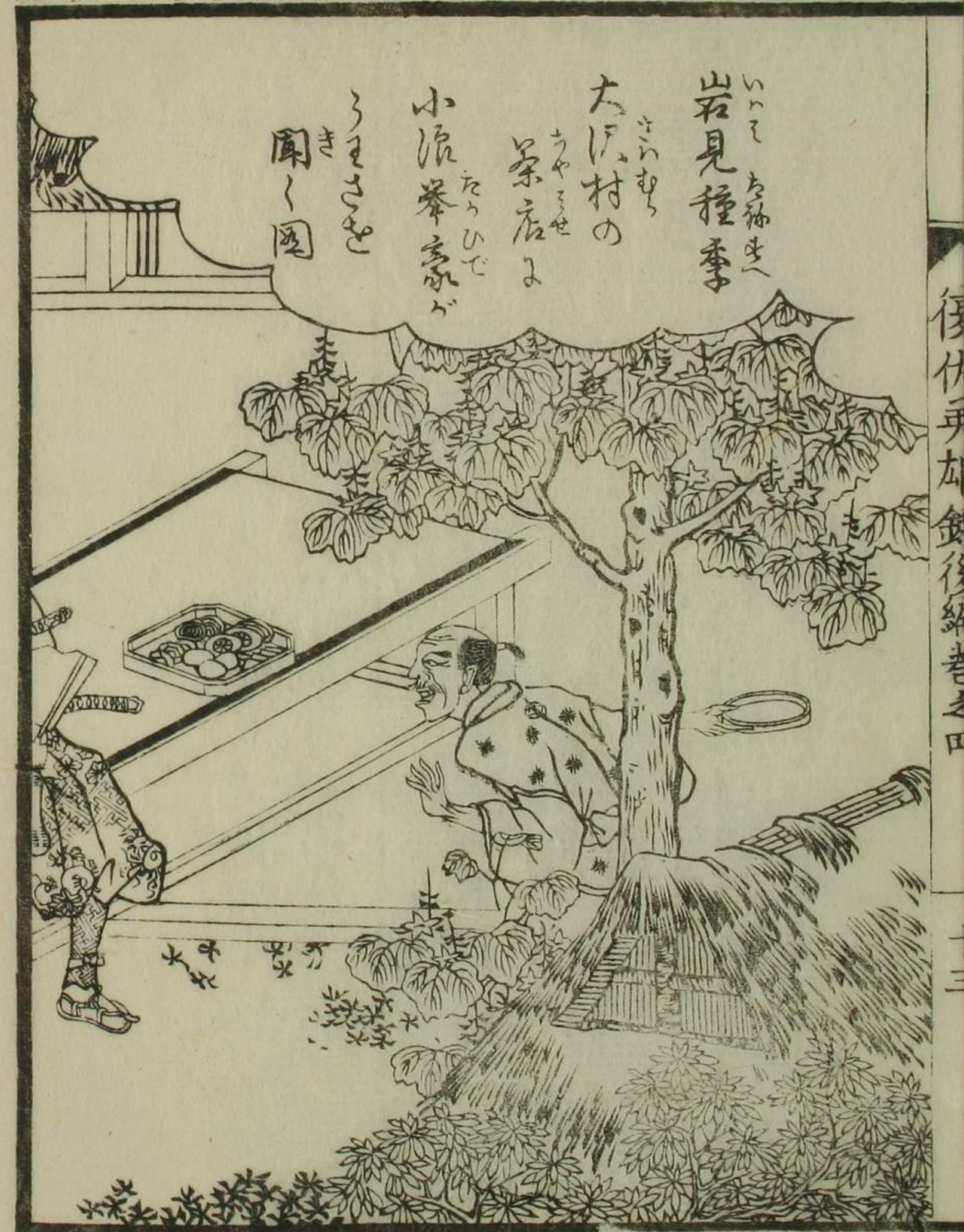
海、じ、時、玉、絹、小、浪、が、方、の、事、と、何、異、と、も、尋、ね、し、し、孫、也、も、小
 浪、が、書、持、女、と、見、送、し、し、り、と、い、若、く、美、妓、女、房、の、見、し、れ、し、と
 大、人、の、内、人、は、い、由、な、と、語、り、し、玉、絹、も、中、は、さ、て、い、ま、め、花、を
 り、二、幕、や、り、し、刀、の、候、ま、い、内、室、も、あ、ぬ、ど、を、盡、の、ほ、ぞ、と、不、圖、も
 急、物、し、も、思、ろ、れ、候、は、め、の、今、か、か、賤、し、し、願、故、遊、女、と、成、ぬ、と、せ
 も、人、の、妻、ふ、で、我、う、女、果、ん、や、付、ら、熱、思、ひ、も、小、浪、は、見、し、人、可
 と、交、る、使、者、ろ、り、と、も、初、め、美、麗、き、書、き、し、あ、小、娘、御、成、志、は、し、し、と
 儀、成、近、人、と、せ、し、れ、い、落、傳、の、性、る、や、む、び、去、が、そ、い、め、思、と、思
 ち、の、ち、も、あ、れ、が、それ、報、ん、た、中、は、後、途、よ、し、心、の、限、り、の、思
 面、を、証、さ、せ、し、し、身、成、任、せ、宿、志、を、執、り、中、あ、ん、い、一生、涯、の、一、大、事、と、思、心
 千、百、度、能、く、その、人、の、公、魂、を、試、し、後、は、怖、ん、事、ある、と、も、遲、く、思、回

てせし中より執待を小浪も餘り公傷けらん二月中旬初頭
より四月の下流に於る通ひ路地ぬのう雷連はひぶるも
野澤の家に在日の稀るる且小浪を玉箱が情希き成り
とつて評説多うりるは老實の才子りんやいほさり遠
より他より人の情託あるもぬきまぬりるよせ貴の傍りの疾
けり所をさ知りて竊にこれと深き愛び練んも病忌喫醋と云
むるは狂憤激しとんと恐とその上舉豪が生依具すけし魂甚
く女房才子りんを如何に憐ると用也ま性るる狂は狂方なり
ぞ見よりの説話更端より岩見重太郎種重
り古(古)二部を通称と云るは狂漢の人の字は伯仲叔季の字を用はるは
兄弟の字を表せし林りれは兄を園きを弟と云ふは狂漢の字を用はるは
ら道(知)字を改るは使りんは必竟假名りれは暫く園き實の名を紛れぬ
又(同)格りしと(重)の字と(同)を(下)狂漢あまは内外の區別して拘りぬと

いなる永禄五年八月十五日は故園なる筑前函崎より闘争に
遠より十月十又日九餘人の女後と戦ふに難なりこれに
一齡僅に成童るも老成の急を廻り災を避り
其次の夜不竊に園を去りし中函畿内小陸東園城周く経歴
講民撃剣の士を歴訪し修練の術を試みりも六年の春秋
を過り今永禄十一年 歳次 戌辰 隻の首より上野國鹿嶋館林よ
り下野なる足利安藤の名郡を過りるが本州を那須小山
守於文等の諸將割據し各耕戦を務めせり就中河内郡宇
都宮の城主宇都宮弥三郎辰系園綱の果世馬箭の名家あるれば
その臣属が隸は武より秀人まるといふとあひりるは重なり於文を指
るも今市の驛森本の村をお城し徳二郎といふ驛の



其五十五 在 後 續 卷 之 四



いんち ちゆき
 岩見 種季
 さいむら
 大に村の
 うやませ
 茶店よ
 たろひで
 小浪 翠 家
 ろまごまご
 き
 聞く 園

復 什 再 如 金 後 續 卷 之 四

一三

こころるる大澤の里外きの茶店に擲りけり惣くひらるる店を
 とて二十餘の男居りしは前程なつ孫宇郎之の形勢とも
 同様に至るるに及ばず彼處より坂東乃六町十八九里に
 今四月中旬の初なれば日を漸長きふすむ未牌よいと書
 くは早く到りせりよるる海に云ふよりいふ事系と云ふ君に定
 武者修行の由方もいふ事ある御身ふいふ宇郎定むせ給ふ
 路の序ふいふは二師の所なきは多武術師公紀の處士野は乃
 先生城宿ふせ給ふと告るる種季その能も告報さし
 それ野はの先生やい如何なる人よと要し聞ははり初見の心
 得便りなきと云も終るは猶もい原某け人其奥州の産にて
 一名家は住まらじ武弁をば浪人と云ふ本州より来り猶も年

にはぬりゆる名を小浪才藏奉豪とよび是年齢二十有餘を
 代も諸般の武藝に熟練その門は入者少くは二月又日の以
 下宇郎定む東玉の武士の暴横を挫ぎ其堂三十餘人川を
 伏し白刃を揮ひ害せんせ世成事ともせば早舟空手にて零
 八席に撃散せしよりその名益々高き不肖の勇士とやどげた
 初に以言のゆるりぬりぬり初にゆるりぬり茶店を立出る
 とも種季いよるる茶店を立出る
 山見種季野尻里坊小浪奉豪話
 岩見言ち郎種季茶店の翁が教は世野尻里より来りて小浪才藏
 奉豪の栖所と行ひ姓名を通はらばば小浪亦小浪才藏
 の社に息接しつと云ふは正廳は種じ茶店を供し一雲五

才藏舉一高家立石で上席は就きりさば種季慇懃は終を行ひて
 物觸の寒暄をのべ留前へは如く某を筑前名時の家へ出見
 皇太后種季と申者よ近軍武者徳行の爲國と云種季は
 地云系り芳名を兼り推系仕る可まは然く身刀法習習の
 希ふ不ふとナルる小浪つらうそ之を表をんつ隆準青眉白面朱
 唇の青素二十歳許一表出群の好男子るさぞ身相徳太
 一多言辭分明たり英風飛ぶ人を龍ひ自然に裁あり
 禮をさしはさそは成勞らひ来意の強領儀いかなを併時其の疲
 侍座なるび今青の繫屋は宿宿あり休息し後ふ日演武
 場にて試撃はるべしとて日酒肴と細く是成を先
 晚餐と供し餐後ぬ明日小浪の演武場とて夜更に二人の

才子にて密聴より重を席ふ斯と若々れ種季を其の案
 内へ送ひて演武場小浪とてつらうに小浪舉豪威儀を正二十餘人の
 門生を兩班と別れさ並居させ少見と向ひる嗚呼が方出はる門
 下此二三子の後学のきよ貴客の歡喜とあるべくいぬねども認法
 お見送り後致し居りしなり失敬といあせども何とも終りの
 高ふけが控くその涙を海容ありと先深染筆に立會玉りる
 べくもやとヤほむ種季完尔とて某とくも修業のるさば
 誰某と對子を選びりさびを得るいかな言及れ小浪生石と
 顧みて并系生出るとを願指し後ひ并系兼去清未熟の拙技
 序指南下さばと望と立て装束し兩把本刀を把り三對を
 種季も静小起身し進より一箇の本刀成れて一揖中央り出

らるがせんをらて轉ひ込本刀并糸透さばたりの刀さ清め右
の本刀を揮う、轉ひんとせら隙もあらずせば山石見が本刀因く折ふ
利攪りて摺地と撃うを刀鋒弓子のち刀をも刃落せば并糸
の面るげふ引く筋へ入替りく七八人の血氣の柱ま甜ふるも色
對ふとも其術を下は拙きよいあふれども神に通せ云妙精妙の
山石見が刀は誰り企及ぶ盛き或は一轉の或は二刀悉く轉ひ伏らば流
者た個と果服と眼を見合せ今い誰りく進む者もな、透巡てそ
る、りり才流洞さくひ物もく、体息もくべしそよそ未熟分が
ら某立會付くべしとて程季城席に就のぬるくや折流修練の
ほだ先刻より目を孩以計り感へいふなり然有刀法鄙意
か會難く存まる新造抑貴客の言ふべき何人より授りり

あるや山石見着てたはひの形やも如何にたか小生幼年より此技を
嗜み深く心を凝し聊自得の旨ありしより心未だく諸人を手交
へ試し不しと必竟師とせ人もいひ依り是と嗚呼はく流流と
唱ふべき振るは強て名を今せんとい敵流とやう人のこと云りとい小
浪盛の家その性元本客も甚しきよ家前より才子数人を愚弄
か如く轉ひ伏せし世に之を立席の一言我を侮り軽むる大言よそ
公中へ懐り実家の説を去る意は得難陰符の句編剣法人の死
活は關する要事豈授受の傳りて可おんや既か近き頃信州よ
く戦死せし世茂田家の謀臣山本勘助睦幸の壮年より諸公を迫
り尊孫の初の内奥常野總の園くを過されしもその刀術は流
よてはし中流八流ありと云 山本氏の近江の人とて依り本流
流

「高橋の匠なり今某が終焉の神道流と云ふ京下総國香取郡飯篠村の人山城守家直の庶嫡秀元の神小形刀槍の術精妙を得て天生正傳神乃流と號せり其流の開西の人なり其系流も亦ん其流を自得の意教流りて云終り其流我流と人やいふ人と改笑するは種季も曰く幾あり彼創法と傳へ白猿公の説りんどの文華は過るる唐人の癖なり信維一兵書技授高し黄石公も張子房の自得乃有るを世に信を以ん為れ高言るるは博識の説も皆て然るもの事といて言難り是とも亦自得の名人も謙讓の公よりこそ自創意せしといて傳授の説とい唱ふ一教も亦ん其強く固執の意なりは諸流は試み其其長らんと其人と歎き去りて一家の説を經るは我は亦其

人あらばそとくはひその教を更練磨の功を要とするなり去を即今君は輕く輸るは亦門下は教を以ん當然我術則神道流なり此後の志の留人のこと言ふは小流は亦ありは渠何をわく我術を言ふくそとそを儕は今眼は鬼を見せり其んぞと公は合く然らず心静み支度るは一某も用意しんんと坐を託し傳乃そはを言ふるなり二間柄の替古繪を把て先是もいり次りたのりは伝らんと其も種季も其の意を任せらるるなりと又も本刀を把りて之を出るは舉意の持るは種を以んて二三度其意を學ぶ裏試み互に進一揖し身構りて八方に眼を配りて對一の教多き並坐門へ其の緊要の務員目覺せ壯觀なりと云ふ

